

# 八重山諸島西表島から得られた日本初記録のハゼ科魚類 *Mugilogobius flavomaculatus* トラハゼ (新称)

富森祐樹<sup>1</sup>・松沼瑞樹<sup>2</sup>・鈴木寿之<sup>3</sup>

<sup>1</sup> 〒631–8505 奈良県奈良市中町 3327–204 近畿大学大学院農学研究科

<sup>2</sup> 〒631–8505 奈良県奈良市中町 3327–204 近畿大学農学部環境管理学科

<sup>3</sup> 〒753–8501 大阪府大阪市東住吉区長居公園 1–23 大阪市立自然史博物館

(2020年3月21日受付；2020年6月5日改訂；2020年6月5日受理；2020年7月3日J-STAGE 早期公開)

キーワード：アベハゼ属, *Mugilogobius mertoni*, タヌキハゼ, ムジナハゼ, 台湾

魚類学雑誌  
Japanese Journal of  
Ichthyology

© The Ichthyological Society of Japan 2020

Yuki Tomimori, Mizuki Matsunuma\* and Toshiyuki Suzuki. 2020. First Japanese record of *Mugilogobius flavomaculatus* (Gobiiformes: Gobiidae) from Iriomote-jima Island, Yaeyama Islands. Japan. J. Ichthyol., 67(2): 171–177. DOI: 10.11369/jji.20–005.

**Abstract** *Mugilogobius flavomaculatus* Huang, Chen, Yung and Shao, 2016 (Gobiiformes: Gobiidae) previously known only from Taiwan was newly recorded from Japan, based on a single specimen (30.9 mm standard length) from Iriomote-jima Island (24°22'N, 123°53'E), Yaeyama Islands, Okinawa Prefecture. The species is characterized by the following combination of characters: body with eight distinct black and seven yellow bands; cheek and operculum with dark net-like marking, surrounding five rounded pale blotches; caudal-fin base with a vertical black bar; first dorsal fin with a somewhat horizontal broad black band, rounded contour and non-filamentous spines; second dorsal- and anal-fin rays I, 8; and predorsal scales 19. Although *M. flavomaculatus* is similar to two presently unidentified Japanese congeners, *Mugilogobius* sp. 2 (Japanese name: Tanuki-haze) and *Mugilogobius* sp. 3 (Mujina-haze), all three being assigned to the *M. mertoni* complex, the former is readily distinguished from the latter two species by the black and yellow bands on the body (body with X-shaped dusky markings in the latter), and (usually) I, 8 second dorsal- and anal-fin rays (usually I, 7). The new standard Japanese name Torahaze is proposed for the species.

\*Corresponding author: Department of Environmental Management, Faculty of Agriculture, Kindai University, 3327–204 Nakamachi, Nara 631–8505, Japan (e-mail: matsunuma@nara.kindai.ac.jp)

ハゼ科アベハゼ属 *Mugilogobius* Smitt, 1900 は、成熟した雄の口が大きく下顎後端が眼の中央まで達するか越えること、頭部に感覚管を欠くこと、頭部背面が微細な柔毛状突起に被われること、鰓孔内縁（肩帯）に突起があること、頬部の孔器列 *c* が眼の下で途切れること、および吻面から両眼間にある孔器列 *p* が長く後鼻孔から眼上方を通り眼の後縁まで続くことで特徴づけられる (Larson, 2001)。本属魚類はインド–西太平洋の温帯・熱帯域から 27 有効種が知られ (Larson, 2001; Larson et al., 2014; Huang et al., 2016)、日本からは学名不詳種を含め 7 種が報告されている (洪

川, 2004; 明仁ほか, 2013)。

1995年8月21日に沖縄県竹富町（西表島）から1個体のアベハゼ属魚類が採集された。本標本を精査したところ、*Mugilogobius flavomaculatus* Huang, Chen, Yung and Shao, 2016 に同定された。本種はこれまで台湾からのみ報告されており (Chou and Kao, 2011; Huang et al., 2016)、日本からの記録はなかった。したがって、本研究では西表島産の標本に基づき、本種を日本から初めて報告するとともに、*M. flavomaculatus* に対して新標準和名を提唱する。

## 材料と方法

計数・計測方法は Larson (2001) および Huang et al. (2016) にしたがった。なお、Huang et al. (2016) の計測形質のうち詳細な説明が無い形質は、下記のように計測した。腹鰭起部での体高 (Body depth at pelvic-fin origin) と臀鰭起部での体高 (Body depth at anal-fin origin) は各起部での体軸に対して垂直な体高を、臀鰭起部での体幅 (Body width at anal-fin origin) は臀鰭起部の位置での最大体幅を計測した。腹鰭前長 (Pre-pelvic length), 肛門前長 (Pre-anus length) および臀鰭前長 (Pre-anal length) は吻端から各鰭の起部または肛門までの直線距離を計測した。最大頭幅 (Head width in maximum) は最大となる頭幅を、主鰓蓋骨上縁での頭幅 (Head width between upper margin of opercle) は主鰓蓋骨上縁間の頭幅を計測した。肉質両眼間隔幅 (Fleshy interorbital width) と骨質両眼間隔幅 (Bony interorbital width) はともに最短距離を計測した。下顎長 (Lower-jaw length) は下顎前端から後端までの直線距離を計測した。また、背鰭間距離 (Distance between dorsal fins) は第1背鰭最後棘の基部後端から第2背鰭起部までの距離とした。体各部の計測はデジタルノギスを用いて 0.1 mm までの精度で測定した。標準体長は体長または SL と表記した。一部の計数形質は両体側で計数した。頭部の孔器列の名称は Sanzo (1911) にしたがった。脊椎骨の計数と担鰭骨の観察には軟 X 線写真を用いた。本報告で調査した標本は神奈川県立生命の星・地球博物館 (KPM), 近畿大学農学部 (KUN), 大阪市立自然史博物館 (OMNH) および横須賀市自然・人文博物館 (YCM) に保管されている。色彩の名称は財団法人日本色彩研究所 (2010) を参考にした。日本産アベハゼ属魚類の標準和名と学名は明仁ほか (2013) にしたがった。生鮮時の体色の記載に用いた標本写真は神奈川県立生命の星・地球博物館の魚類写真資料データベース (KPM-NR) に登録されている。

*Mugilogobius flavomaculatus* Huang, Chen,  
Yung and Shao, 2016  
トラハゼ (新称)  
(Figs. 1, 2 ; Tables 1, 2)

*Mugilogobius* sp. 5: Chou and Kao, 2011: 282,  
unnumbered figs. (Taiwan, brief description).

*Mugilogobius flavomaculatus* Huang, Chen, Yung and Shao, 2016: 6, figs. 4A, 5, 6A (type locality: estuary of Zhuan River, Toucheng Township, Yilan County, Taiwan).

**標本** OMNH-P 44263, 体長 30.9 mm, 雄, 沖縄県八重山郡竹富町西表島ユツン川 (汽水域上部脇の汽水性湿地), たも網, 1995 年 8 月 21 日, 鈴木寿之・細川正富。

**画像資料** KPM-NR 21176.

**記載** 計測と計数値は Tables 1, 2 に示した。頭部はやや縦扁する。体は細長い円筒形で、後方に向かうにつれて側扁する (Fig. 1)。尾柄は側扁し、後方に向かうにつれてわずかに細くなる。体高は低く、第1背鰭第2棘基部で最大である。頭部背面は吻端から両眼間隔付近から吻端にかけて微細な柔毛状突起で被われる。吻端は丸く、わずかに突出する。前鼻孔は短い管の先端に開穴する。後鼻孔は楕円形で、眼の直前に位置する。頬部は膨らむ。口裂は斜位で大きく、その後端は眼の中央直下に達する。下顎後端は眼の後縁直下に達する。両唇は薄く、両顎の先端はほぼ等位である。眼はやや小さく頭部側面に位置し、眼径は吻長より短い。両眼間は広く平らで、肉質両眼間隔幅は眼径の 1.6 倍である。鰓孔の下端は鰓蓋部中央直下よりやや前方に達し、鰓膜は広く峡部で癒合する。鰓孔内縁 (肩帯) に突起がある。両顎には先端が内側にやや曲がった小さな犬歯状円錐歯が不規則に 3-5 列並ぶ。背鰭は 2 基で、両背鰭は近接するが連続しない。第1背鰭は半円形で、胸鰭中央上方よりやや前方から始まる。背鰭棘は糸状に伸長せず、第4棘が最長である。後方に倒した第1背鰭の後端は第2背鰭起部を越えない。第2背鰭は肛門上方よりわずかに後方から始まり、縁辺はなだらかな凸状で、第8軟条が最長である。後方に倒した第2背鰭の後端は尾鰭基部をわずかに越える。臀鰭は第2背鰭の第1棘から第1軟条間の中央直下から始まり、縁辺はなだらかな凸状で、第8軟条が最長である。後方に倒した臀鰭の後端は尾鰭基部に達しない。第2背鰭と臀鰭の後端は尖る。胸鰭は後縁が丸く、中央の第8軟条が最長である。腹鰭は円形で、その起部は胸鰭基部直下に位置する。尾鰭は円形である。体側は櫛鱗で被われ、後方に向かうにつれて鱗が大きくなる。背鰭前方域は眼後端のやや後方までが大きさの均一な小円鱗 (体側中央の鱗の約 3 分の 2 の大きさ) で被われ、それより前方は無鱗である。頭部側面



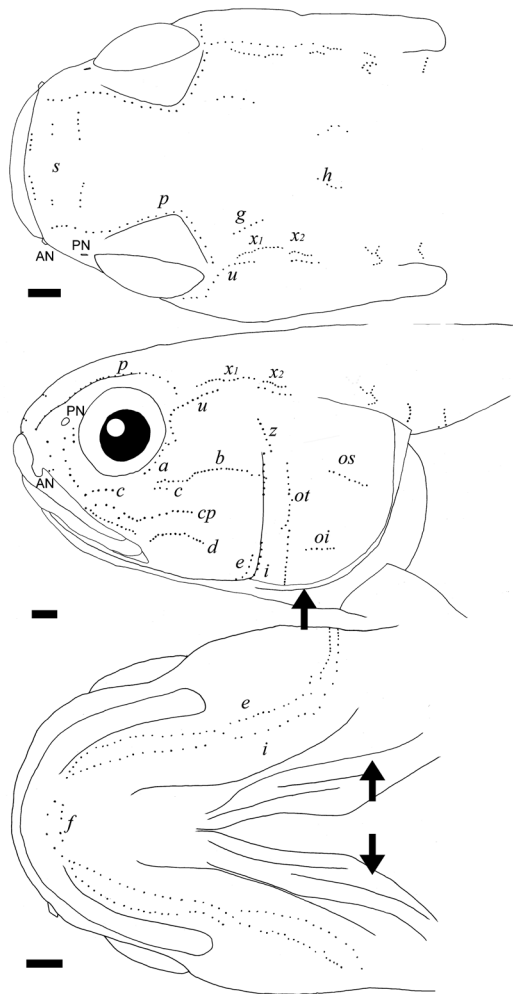
**Fig. 1.** Fresh (A) and preserved (B, C) specimen of *Mugilogobius flavomaculatus* from Japan. OMNH-P 44263, male, 30.9 mm SL, Iriomote-jima Island, Yaeyama Islands, Okinawa Prefecture, Japan.

は鰓蓋部上方の小円鱗を除き無鱗である。体の腹面は峡部から肛門前方まで小円鱗で被われる。

頭部は感覚管を欠き、孔器列は縦列型 (Fig. 2) である。頬部と眼後方には孔器列 *a*, *b*, *c*, *cp*, *d*, *u*,  $x^1$ ,  $x^2$  および *z* がある。孔器列 *a* の長さは眼径の約半分の長さである。孔器列 *b* は眼径よりわずかに長い。孔器列 *c* は眼の中央直下で途切れ、後部が短い。孔器列 *cp* は孔器列 *b* とほぼ同長である。孔器列 *d* は眼径よりわずかに長い。孔器列 *u* は孔器列 *d* とほぼ同長である。鰓蓋部には孔器列 *oi*, *os* および *ot* があり、それぞれ連続しない。頭部背面には孔器列 *g*, *h*, *p* および *s* がある。孔器列 *p* は長く後鼻孔の前方から始まり眼上方を通り眼の後縁まで続く。孔器列 *s* は3横列で構成さ

れる。頭部腹面には孔器列 *e*, *f* および *i* がある。孔器列 *f* は横列で、1対あり、右側は2個、左側は3個の孔器で構成される。

**色彩** 生鮮時の色彩 (Fig. 1A) : 体側に7本の明瞭な明るい黄の横帯と8本の赤みのグレイの横帯が交互に並ぶ。7本の明るい黄の横帯のうち1本目は第1背鰭前方下、2本目は第1背鰭基底下、3本目は両背鰭間、4、5本目は第2背鰭基底下、および6、7本目は尾柄に位置する。吻部の地色はグレイである。上唇と下唇はグレイである。眼前縁から上唇にかけて赤みのグレイの斜走帯が1本ある。頬部から鰓蓋部にかけて黄みのグレイの丸みを帯びた斑紋が5つあり、その周囲に赤みのグレイの網目模様がある。鰓蓋部上方から胸鰭基部



**Fig. 2.** Dorsal (top), lateral (middle) and ventral (bottom) views of head of *Mugilogobius flavomaculatus* (OMNH-P 44263, 30.9 mm SL). Dots with italic lowercase letters indicate sensory-papillae rows. Black arrows indicate ventral-most point of gill opening. AN and PN indicate anterior and posterior narial pores, respectively. Bars indicate 1 mm.

後方にかけて赤みのグレイの斜走帯1本と明るい黄の横帯1本が並ぶ。第2背鰭，臀鰭および尾鰭の地色は半透明の黒である。第1背鰭の第1棘から第6棘間の鰭膜下部は明るい黄で，その上縁に沿って内側から黒色帯，黄色帯および半透明の白帯があり，さらにその縁辺は黒く縁どられる。第2背鰭の第2-5，7，8軟条下半部に不明瞭な黄色斑が1つつある。第2背鰭の縁辺は黒く縁どられ，その下縁に沿って半透明の白色縦帯がある。臀鰭は上半部が明るい黄で，縁辺は半透明の白で縁どられる。尾鰭の中央部は明るい黄で，基部付近に1本の黒色横帯がある。胸鰭は半透明の白

で，基部が赤褐色である。腹鰭は黒で，縁辺へ向かうにつれて半透明になる。

固定後の色彩 (Fig. 1B, C)：体側および頭部の明るい黄，赤みのグレイはすべてうすい黄となり，赤みのグレイはあさい黄みのブラウンとなる。各鰭の明るい黄色帯または明るい黄色斑は消失し，黒は半透明の黒となり，半透明の黒は半透明のグレイとなる。

**分布** これまで本種は台湾からのみ記録されており (Chou and Kao, 2011；Huang et al., 2016)，本研究によって新たに西表島から記録された。

**生息状況** 西表島産の標本は河川汽水域上端部脇の汽水性湿地から採集された。台湾では河川河口域から中下流域に生息する (Chou and Kao, 2011)。Huang et al. (2016)によれば，タイプ産地である宜蘭県の竹安川 (Zhu'an River) 河口では，*M. flavomaculatus* は同所的に出現する *Mugilogobius mertoni* (Weber, 1911) が採集された場所よりも低塩分の場所 (0.1-0.4 psu) に生息する (Huang et al., 2016)。

**考察** 西表島から得られた1標本は，体側に明瞭な8本の赤みのグレイ (暗色) の横帯があること，頬部から鰓蓋部にかけて赤みのグレイ (暗色) の網目模様があること，第1背鰭は半円形で，棘が糸状に伸長しないこと，第1背鰭に孤状の黒色帯があること，尾鰭基底に1本の赤みのグレイ (暗色) の横帯があること，背鰭前方鱗数は19であること，第2背鰭および臀鰭鰭条数が1, 8であることなどの形質が Huang et al. (2016) が記載した *M. flavomaculatus* の特徴と一致したため，本種に同定された。

西表島産の *M. flavomaculatus* と Huang et al. (2016) が示した *M. flavomaculatus* の計数・計測値を比較すると，前者では吻長が頭長の31.9% (後者では35.4-36.5%)，尾柄高が体長の15.1% (11.7-13.3%)，縦列鱗数 (左体側) が37 (34-35) などの差異が認められた (Tables 1, 2)。これらの差異はわずかであることから，Huang et al. (2016) が *M. flavomaculatus* を記載する際に計測した標本が4個体 (雄3個体，雌1個体) と少数であることに起因する *M. flavomaculatus* の種内変異の範囲内であると考えられる。一方，最大頭幅の頭長に対する割合は西表島産標本と Huang et al. (2016) の記載の間で大きな差異がみられた (前者では頭長の64.0%，後者では78.6-83.0%)。これは Huang et al. (2016) では鰓蓋部が膨らんだ状態で計測したことに起因する可能性があるが，今後より多くの個体を用いた検討が必要である。

**Table 1.** Counts of *Mugilogobius flavomaculatus* from Japan and Taiwan

	This study (Japan)	Huang et al. (2016) (Taiwan)
	OMNH-P 44263	<i>n</i> = 7
Dorsal-fin rays	VI-I, 8	VI-I, 7 or 8
Anal-fin rays	I, 8	I, 8
Pectoral-fin rays (left / right)	14 / 15	14–16
Longitudinal scales (left / right)	37 / 35	34 or 35
Transverse scales	12	10 or 11
Transverse scales (backward)	12	—
Predorsal scales	19	18–21
Circumpeduncular scales	14	—
Vertebrae	10+16	10+16
Pterygiophore formula	3-12210	—
Segmented caudal-fin rays (upper / lower)	15 (8 / 7)	—
Branched caudal-fin rays (upper / lower)	15 (8 / 7)	—

西表島産標本の孔器列 *f* は左右 1 対で右側は 2 個、左側は 3 個の孔器で構成されるのに対して、Huang et al. (2016: fig. 5) では左右 1 対で各々が 2 個と記載・描画されている。また、西表島産標本では頭部背面に孔器列 *h* があるのに対し、Huang et al. (2016: fig. 5) ではその有無について記載されておらず、孔器列 *h* にあたる孔器列も描画されていない。これら差異が種内変異であるかどうかは今後より多くの標本に基づいた検討が必要である。

なお、Huang et al. (2016) は項部後方（胸鰭基部の直上）に位置する暗色横帯を頭部に位置する横帯とみなし、体側の暗色横帯を 7 本と記載したが、本研究ではこれを体側の暗色（記載では赤みのグレイと表記）横帯に含めた。

*Mugilogobius flavomaculatus* はこれまで *Mugilogobius mertoni* (Weber, 1911) と混同されてきた (Huang et al., 2016)。後者には多くの色彩変異が知られており (Larson, 2001; 明仁ほか, 2013)、遺伝・形態的に複数種が混同されていることが指摘されている (明仁ほか, 2013; Huang et al., 2016)。例えば Larson (2001) が再記載した *M. mertoni* の中には、形態的に識別することができるタヌキハゼ *Mugilogobius* sp. 2 とムジナハゼ *Mugilogobius* sp. 3 が含まれることが知られている (明仁ほか, 2013)。*Mugilogobius flavomaculatus* は近似のタヌキハゼとムジナハゼと比較して、体側に 8 本の明瞭な暗色横帯と 7 本の黄色横帯があること（タヌキハゼとムジナハゼでは不明瞭な X 字形の暗色斑が並び、格子状の模様を形成する）、第 2 背鰭と臀鰭鰭条数が通常 I, 8 であること（通常 I, 7）、背鰭前方鱗は大きさが均一の小円鱗であること（最前部付近の鱗が後方の鱗

よりも大きい）などの特徴で容易に区別される (Huang et al., 2016; 本研究)。さらに、*M. flavomaculatus* はムジナハゼと比較して、第 1 背鰭第 1 棘が伸長しないこと（ムジナハゼでは雄と大型の雌の第 1 背鰭第 1 棘が糸状に伸長する）、および縦列鱗数が多く 35–37 であること（29–32）でも区別される (Huang et al., 2016; 本研究)。

Huang et al. (2016) は Larson (2001) が記載した *M. mertoni* には形態的に識別される 3 種が含まれるとし、そのうちの 1 種を *M. flavomaculatus* として新種記載した。また、Huang et al. (2016) は、残りの 2 種のうち第 1 背鰭第 1 棘が伸長する種を *M. mertoni*、伸長しない種を *Mugilogobius* sp. として扱った。Huang et al. (2016) では彼女らの *M. mertoni* および *Mugilogobius* sp. とムジナハゼおよびタヌキハゼの関係について述べられていないが、Huang et al. (2016) の *M. mertoni* は、縦列鱗数が 30–31 であることや第 1 背鰭第 1 棘が糸状に伸長することなどからムジナハゼに一致する可能性がある (本研究)。一方、Huang et al. (2016) の *Mugilogobius* sp. は、第 1 背鰭棘が伸長しないことがタヌキハゼの特徴と一致するが、縦列鱗数が少ない（前者では 34–35 に対して後者では 34–39）といった差異がある (本研究)。ムジナハゼとタヌキハゼの学名決定には今後のさらなる研究が必要である。

*Mugilogobius flavomaculatus* はこれまで台湾からのみ記録されていた [Chou and Kao, 2011 (*Mugilogobius* sp. 5 として); Huang et al., 2016]。したがって本研究で記載した標本は本種の日本からの初めての記録を示すものとなる。国内からの本種の記録は、これまでに今回の報告以外に知られておらず、著

**Table 2.** Measurements (expressed as percentage of SL) of *Mugilogobius flavomaculatus* from Japan and Taiwan

	This study (Japan)	Huang et al. (2016) (Taiwan)		
	OMNH-P 44263	Holotype	Paratypes	
Sex	male	male	males	female
Number of specimens	1	1	2	1
Standard length (mm; SL)	30.9	33.0	25.7–28.1	
Measurements (% SL)				
Body depth at pelvic-fin origin	19.4	18.5	16.8–17.4	18.0
Body depth at anal-fin origin	19.3	16.5	16.5–17.8	19.2
Body width at anal-fin origin	12.5	14.6	14.0–14.2	13.2
Head length (HL)	29.3	27.2	26.6–27.1	25.0
Snout to D2 origin length	57.6	57.7	57.9–58.1	56.9
Pre-dorsal length	37.0	37.9	36.3–37.6	35.0
Pre-pelvic length	28.0	29.7	27.0–28.0	28.3
Pre-anus length	55.9	52.8	53.8–55.4	54.9
Pre-anal length	58.0	57.1	58.0–58.6	58.2
Distance between pelvic-fin origin and anus	26.4	–	–	–
1st dorsal-fin base length	12.4	11.1	10.8–11.9	10.7
2nd dorsal-fin base length	21.6	19.6	20.0–20.5	18.1
Distance between dorsal fins	7.9	–	–	–
1st spine length of D1	9.0	–	–	–
2nd spine length of D1	10.8	–	–	–
3rd spine length of D1	12.5	–	–	–
4th spine length of D1	13.2	–	–	–
5th spine length of D1	11.8	–	–	–
6th spine length of D1	4.9	–	–	–
Pectoral-fin length	24.0	22.4	20.6–21.9	20.2
Pelvic-fin length	17.4	17.4	16.4–16.5	15.3
Anal-fin base length	19.4	19.5	17.7–18.0	17.4
Caudal-fin length	29.4	25.2	24.3–24.9	22.4
Caudal-peduncle length	26.0	27.3	26.0–26.6	26.0
Caudal-peduncle depth	15.1	12.5	11.7–13.3	13.0
Measurement (% HL)				
Snout length	31.9	36.5	35.4–36.5	33.8
Head depth	53.4	–	–	–
Head width at upper margin of opercle	51.3	55.2	56.2–58.3	59.2
Head width in maximum	64.0	78.6	79.1–83.0	80.1
Eye diameter	25.8	28.2	26.1–26.9	30.2
Bony interorbital width	21.0	22.2	22.8–23.7	25.4
Fleshy interorbital width	39.7	38.5	37.8–38.5	39.3
Lower-jaw length	45.1	45.2	45.1–46.5	43.3
Cheek depth	35.5	30.7	28.7–30.1	27.8
Postorbital length	58.1	56.2	55.8–56.5	56.6

D1 and D2 indicate 1st and 2nd dorsal fins, respectively

者らが行った琉球列島南部での魚類相調査や国内の博物館等研究機関の魚類標本コレクションの調査でも追加の標本は得られていない。したがって、西表島産標本は海洋浮遊期の仔魚が海流によって

台湾から偶発的に輸送され、成長した個体が採集された可能性があると考えられる。なお、本種と同属のアベハゼ *Mugilogobius abei* (Jordan and Snyder, 1901) はふ化後 44 日頃に浮遊期を終え、底棲生活



に移行することが知られている (Kanabashira et al., 1980).

*Mugilogobius flavomaculatus* には標準和名が与えられていなかったため、本研究では西表島産の標本 (OMNH-P 44263) に基づき、新標準和名トラハゼを提唱する。これは本種の体側に黄色横帯と暗色横帯が交互に並ぶことが、トラ柄模様を連想させることに因む。

**比較標本** タヌキハゼ (52 個体, 体長 18.7–42.4 mm), 八重山諸島石垣島: YCM-P 8737, 体長 39.2 mm. 八重山諸島西表島: KPM-NI 5773, 体長 31.4 mm; KPM-NI 5792, 体長 29.5 mm; KPM-NI 5826, 体長 20.7 mm; KPM-NI 19636, 体長 18.9 mm; KUN-P 50446, 体長 30.6 mm; KUN-P 50447, 体長 30.9 mm; KUN-P 50492, 体長 25.4 mm; KUN-P 50493, 体長 25.2 mm; KUN-P 50494, 体長 21.2 mm; KUN-P 50495, 体長 20.4 mm; KUN-P 50496, 体長 21.8 mm; KUN-P 50497, 体長 19.7 mm; KUN-P 50498, 体長 22.4 mm; KUN-P 50465, 体長 37.1 mm; KUN-P 50478, 体長 42.4 mm; KUN-P 50483, 体長 24.0 mm; KUN-P 50486, 体長 18.7 mm; KUN-P 50506, 体長 39.7 mm; KUN-P 50507, 体長 35.9 mm; KUN-P 50508, 体長 30.1 mm; KUN-P 50509, 体長 29.2 mm; KUN-P 50510, 体長 28.6 mm; KUN-P 50511, 体長 26.2 mm; KUN-P 50515, 体長 34.6 mm; KUN-P 50516, 体長 33.9 mm; KUN-P 50517, 体長 30.2 mm; KUN-P 50518, 体長 35.6 mm; KUN-P 50519, 体長 32.0 mm; KUN-P 50520, 体長 27.7 mm; KUN-P 50521, 体長 25.8 mm; KUN-P 50522, 体長 30.4 mm; KUN-P 50523, 体長 34.1 mm; KUN-P 50524, 体長 31.8 mm; KUN-P 50525, 体長 32.6 mm; KUN-P 50526, 体長 25.9 mm; KUN-P 50527, 体長 26.4 mm; KUN-P 50528, 体長 25.2 mm; KUN-P 50529, 体長 21.9 mm; KUN-P 50530, 体長 21.2 mm; KUN-P 50531, 体長 19.4 mm; KUN-P 50543, 体長 34.1 mm; KUN-P 50544, 体長 28.3 mm; KUN-P 50545, 体長 33.8 mm; KUN-P 50546, 体長 32.2 mm; KUN-P 50547, 体長 27.7 mm; OMNH-P 44270, 2 個体, 体長 20.8–21.8 mm; YCM-P 8366, 体長 38.5 mm; YCM-P 8621, 体長 35.0 mm; YCM-P 8666, 体長 39.2 mm; YCM-P 9067, 体長 29.2 mm.

ムジナハゼ (26 個体, 体長 17.8–34.7 mm), 沖縄諸島沖繩島: OMNH-P 32603, 体長 21.6 mm; OMNH-P 32604, 体長 20.2 mm; OMNH-P 44275, 2 個体, 体長 21.9–23.5 mm. 八重山諸島石垣島: OMNH-P 44277, 10 個体, 体長 17.8–29.0 mm. 八重山諸島西表島: KUN-P 50604, 体長 34.7 mm; KUN-P 50605, 体長 31.3 mm; KUN-P 50617, 体長

29.0 mm; OMNH-P 44264, 体長 25.0 mm; OMNH-P 44265, 体長 27.6 mm; OMNH-P 44266, 体長 27.6 mm; OMNH-P 44267, 体長 28.4 mm; OMNH-P 44268, 体長 29.0 mm; OMNH-P 44269, 体長 30.7 mm; OMNH-P 44276, 3 個体, 体長 20.7–23.2 mm.

## 謝 辞

本報告をとりまとめるにあたり、細川正富氏 (兵庫県川西市) には標本の採集にご協力いただいた。大迫尚晴氏 (沖縄県宜野湾市), 瀬能 宏氏 (神奈川県立生命の星・地球博物館), 松井彰子氏 (大阪市立自然史博物館), 萩原清司氏 (横須賀市自然・人文博物館) には標本を観察する機会を頂いた。ここに記して感謝の意を表する。

## 引用文献

- 明仁・坂本勝一・池田祐二・藍澤正宏. 2013. ハゼ垂目. 中坊徹次 (編), pp. 1347–1608, 2109–2211. 日本産魚類検索 全種の同定 第三版. 東海大学出版会, 秦野.
- Chou, M.-T. and Y.-C. Kao. 2011. The freshwater and estuarine fish of Taiwan. Morning Star Publishing Press, Taipei. 381 pp.
- Huang, S.-P., I.-S. Chen, M. M. N. Yung and K.-T. Shao. 2016. The recognition and molecular phylogeny of *Mugilogobius mertoni* complex (Teleostei: Gobiidae), with description of a new cryptic species of *M. flavomaculatus* from Taiwan. Zool. Stud., 55 (39): 1–16.
- Kanabashira, Y., H. Sakai and F. Yasuda. 1980. Early development and reproductive behavior of the gobiid fish, *Mugilogobius abei*. Japan. J. Ichthyol., 27: 191–198.
- Larson, H. K. 2001. A revision of the gobiid fish genus *Mugilogobius* (Teleostei: Gobioidae), and its systematic placement. Rec. West. Aust. Mus. Suppl., 62: i–iv + 1–233.
- Larson, H. K., M. F. Geiger, R. K. Hadiaty and F. Herder. 2014. *Mugilogobius hitam*, a new species of freshwater goby (Teleostei: Gobioidae: Gobiidae) from Lake Towuti, central Sulawesi, Indonesia. Raffles Bull. Zool., 62: 718–725.
- Sanzo, L. 1911. Distribuzione della papille cutanee (organi ciatiforme) esuo valore sistematic nei Gobi. Mitt. Zool. Sta. Neapel, 20: 249–328.
- 渋谷浩一. 2004. アベハゼ属. 瀬能 宏 (監修), p. 407. 決定版日本のハゼ. 平凡社, 東京.
- 財団法人日本色彩研究所. 2010. 改訂版 色名小事典. 日本色研事業株式会社, 東京. 90 pp.